

アキール文庫カシミール関連コレクション [A309]*

小倉 智史**

Publications Related to Kashmir in the Aqeel Collection: an Overview

OGURA Satoshi

The Aqeel Collection of Kyoto University includes a series of books related to the history of Kashmir and Kashmir issues, published in both India and Pakistan. Kashmir, the highland hemmed in by the high mountains of the Himalayas on the North-Western frontier of South Asia, has been the subject of a territorial conflict between India and Pakistan since the independences of the two countries in 1947, including three Indo-Pakistani wars in 1949, 1965, and 1971. Besides the process of the conflict itself and attempts at solving problems peacefully by India and Pakistan, an academic subject can be made on the interest of the citizens of both countries in Kashmir. The Aqeel collection shows us some of the aspects of Pakistani Muslim intellectuals' interests in the area.

The fact that Dr. Aqeel's collection has some rare and important editions and Urdu translations of the primary sources on the pre-modern history of Kashmir indicates how the publishing industry in Pakistan has vigorously published books related to the subject, and also Dr. Aqeel's deep interest in it.

It should be stressed that, contrastingly, his collection has no books related to the notion of so-called "Kashmiriyat (secular syncretism of Kashmiri tradition or ethnic sub-nationalism of Kashmiri Muslims)", chiefly claimed by Muslim intellectuals and independence campaigners in Indian Kashmir. Since the mid-1970s, the Cultural Academy and some Muslim intellectuals in Indian Kashmir have emphasized the role of two Kashmiri ascetic poets, Lallā and Nūr al-Dīn in the cultural history of Kashmir, and claimed to find "secularism" in their poems. However, such a notion has not been shared with Pakistani Muslims. The absence of books on "Kashmiriyat" in Dr. Aqeel's collection presumably reflects the difference between the image of the cultural and religious identity of Kashmir held by Muslims in Indian Kashmir and that held by Pakistani Muslims.

モイースツディーン・アキール博士は傑出した書籍の蒐集家であり、アキール文庫に収められている文献はさながら蒼海の如く浩瀚かつ多岐にわたる。氏のコレクションを以って現代パキスタンのムスリム知識人たちの思考や関心の総体を論じるのはいささか乱暴に過ぎるとは言え、少なくともその一部を窺い知ることができるのは間違いないだろう。本節で取り上げるのは、A309の棚に収められたカシミール地方関連のコレクションである。アキール文庫のカシミール関連書籍のコレクションは、個々の書籍の価値はもとより、現代パキスタンのムスリム知識人がカシミール地方についてどのような知識をもち、またどのような関心を抱いているかを窺い知る、一つの材料ともなるだろう。

* 本稿は、科学研究費プロジェクト「南アジア諸語イスラーム文献の出版・伝播に関する総合的研究」(課題番号24320017)の研究成果の一部である。

** 日本学術振興会特別研究員(PD)

前近代のカシミールに関しては、パキスタンで出版された一次史料の校訂やウルドゥー語訳など、入手困難な文献が収録されているのが目につく。後述するムッラー・シャー・ムハンマド・シャーハーパーディー『ラージャタランギーネルシア語訳 *Rāj Tarangīnī Tarjuma-yi Fārsī*』(AQEEL||A||309||27) やホージャ・ムハンマド・アアザム・ディーダマリー『カシミールの出来事 *Wāqī'āt-i Kashmīr*』(AQEEL ||A||309||14) が代表的なもので、パキスタンにおけるカシミール史書の出版状況や、同氏の関心の高さが見て取れる。また、カシミールにイスラームを齎したとされるクブラウィーヤのスーフィー、アリー・ハマダーニー (1314–1385) についての文献では、ムハンマド・リヤーズ『ミール・サイイド・アリー・ハマダーニーの生涯と事績と詩 *Aḥwāl wa Āthār wa Ash'ār-i Mīr Sayyid 'Alī Hamadānī*』(AQEEL||A||309||29) がこの棚に収められている。タズキラや聖者伝の棚ではなく、ここに同書が収められている理由は、アリー・ハマダーニーとカシミールの繋がりをアキール博士が意識しているためであろう¹⁾。ドゥグラ・マハラージャのグラブ・スィング (1792–1857) 統治下のジャンムー、キシウトワール、カシミール、ラダック、アクサーイエ・チーン (アクサイチン) を扱ったハシマトウッラー・ハーン『ジャンムー簡史 *Mukhtaṣar-i Tārīkh-i Jammūg*』Lucknow, Maṭba'ī Muḥammad Tiḡh Bahādūr, 1939 (AQEEL ||A||309||9) は、現在入手不可能な稀観本である。

現代カシミールを扱った文献としては、ムムターズ・アフマド『カシミール問題——歴史、政治、法的な考察 *Mas'ala-yi Kashmīr: tārikh, siyāsī awr qānūnī muṭāli'ah*』Lahore, al-Mihrāb, 1970 (AQEEL||A||309||20) があり、本書はかのアブルアアラー・マウドゥディーがレビューをしている。また、ミール・グラーム・アフマド・カシュフィー『カシミールは我々のものだ! *Kashmīr hamārā hai!*』Lahore, Agha Amīr Husayn Classic Publishers, 1965 のような、些か過激なタイトルの文献もある。

さて、アキール文庫のカシミールの棚において、或る類の文献が全く欠落していることも指摘しておかねばならない。それは「カシミールーヤト」と呼ばれる、インド側カシミールにおいて、主に分離独立派によって主張されるエスニック・アイデンティティあるいはカルチュラル・アイデンティティに関連する文献である。カシミールーヤトとは 1970 年代半ば頃から使われだした用語で、カシミール独自の融和的な文化伝統を指す [Zutshi 2004; 拓 2011]。その象徴として取り上げられるのが、14 世紀から 15 世紀にかけて活躍した 2 人の聖者、ラッラーとヌールッディーン (ca. 1378–1438) である。彼らが詠んだとされるカシミール語の詩に、現代のインド側カシミールの文化人らは「融和的」で「セクラー」な文化伝統を見出し、それを以ってカシミールの分離独立派らは、ヒンドゥーにもイスラームにも単純には回収され得ない、「カシミールらしい」カルチュラル・アイデンティティの歴史的存在を主張する。今日スリナガル最大の書店である Gulshan Books を訪れれば、そこにタサウワフの書籍と並び、多くのラッラーやヌールッディーンに関する詩や、カシミールーヤトの歴史的継続性を主張する書籍が店頭に並んでいるのを目にするだろう。またカシミール大学には、Markaz-i Noor Sheikh ul-Alam Chair という部局が置かれ、ヌールッディーンの詩を扱う *'Alamdār* という雑誌が刊行されている。このようなカシミールーヤトに関する文献が、アキール文庫には一冊も見られないのである。

アキール博士がインド側カシミールで出版された刊行物をどの程度把握していたかは明らかではないが (Muḥammad al-Dīn Fawq, *Shabāb-i Kashmīr*, Srinagar, Gulshan Books, 1984 (AQEEL ||A||309||24) が収められていることから、1980 年代半ば頃まではスリナガルで出版された書籍についても、あ

1) なお、アリー・ハマダーニーを取り上げた雑誌の特集号などが、アキール文庫Cの棚に収められている。例えば *Mīr Sayyid 'Alī Hamadānī (Shāh-i Hamadān) Khuṣūṣī nambar, Paighām-i Ashnā, Shumāra 13–14, 2003 (AQEEL||C||503||4)*。

る程度知り得ていたものと思われる)、筆者個人の経験に照らしてみると、パキスタン側のイスラム知識人の間では、インド側カシミールの人々が主張するようなカシミールへの関心は極めて希薄であり、アキール文庫に所蔵されている文献の偏りも、そのような状況に沿ったものだと考えられる。パキスタンでカシミールの宗教・文化伝統として強調されるのは何につけてもイスラームであり、そのアイコンとして持ちだされるのは、アリー・ハマダーニーである。1987年にアーザード・カシミール州ムザフファラーバードで開催された第1回 *Shah-e-Hamadan International Conference* では、かのズィヤーウル・ハック将軍が基調講演を行っており [Zia ul-Haq 1988]、その後もナワーズ・シャリーフが出席するなどしている [Elias 2000: 395–396]。パキスタンの研究者のみならず、政治家もアリー・ハマダーニーを重視し、それを利用する言説を発していることが分かるだろう。さらに、ムジャーヒディーン運動を始めとする急進派組織の領域的な関心は、基本的にダール・アル＝イスラームかダール・アル＝ハルブかという点であり、インド側カシミールの分離独立派が抱いているような、統合された一つのカシミールをセキュラーな国家、あるいは準国家として独立させるという願望を、恐らく全く共有していない²⁾。インド・パキスタン両国が独立してから70年の月日が過ぎようとしているが、管理ラインで分断された地理的な面のみならず、何がカシミールのアイデンティティ足りえ、如何なるアイデンティティの許にカシミールにおける政治体制が存立すべきなのかという理解の面においても、インド側・パキスタン側の人々は異なる方向を向き始めている。アキール文庫のカシミール関連文献の棚は、そのような断絶の一例と言えるかもしれない。

Mullā *Shāh* Muḥammad *Shāhābādī*, 1974, *Rāj Tarangīnī Tarjuma-yi Fārsī*, Šābir Āfāqī (ed.), Rawalpindi, Iran Pakistan Institute of Persian Studies. (AQEEL||A||309||27)

『ラージャタランギニー』とは、第二ローハラ朝治下(1101–1320 CE)にカシミールにおいて、12世紀半ばに詩人カルハナが編纂したサンスクリットのカシミール歴史叙事詩、およびシャーミール朝(1339–1561 CE)時代に編纂されたその続編群のことである。1586年にカシミールがムガル帝国に併合されたのち、1589年に同地に行幸した皇帝アクバルの許に『ラージャタランギニー』の写本が献呈され、その内容に興味を持ったアクバルは同書をペルシア語に翻訳することを命じた。『ラージャタランギニー』ペルシア語訳の現存している諸写本には、カルハナによる第一作と、シャーミール朝時代の続編群が共に含まれているが、本書はこのうちカルハナの『ラージャタランギニー』の部分を校訂したものである。校訂にあたってサービル・アーファーキー(1933–2011)はカルカタ(当時)のアジア協会所蔵1写本と、大英図書館所蔵2写本のマイクロフィルム(いずれもテヘラン大学に所蔵)を参照しており、校訂の質は概ね良好である。『ラージャタランギニー』ペルシア語訳は1590年代以降に編纂されたペルシア語史書において貴重な情報源となっており、ムガル帝国時代のペルシア語歴史叙述研究において重要な一書である。また、サンスクリット原典との比較を通じた翻訳の様相や、イスラム到来以前の南アジア史をイスラムがどのように受容したのかという点も興味深い。

2) 同様の領域的関心は、パキスタンの歴史研究者の中にも見られる。ガンダーラ・ヒマラヤ西部地域の先史・古代史研究において世界的な研究者であったアフマド・ハサン・ダーニー(1920–2009)は、その主著たる *History of Northern Areas of Pakistan (Up to 2000 AD)* を「ギルギットとスカルドゥの *Freedom Fighter* たち」に捧げている。また、ギルギットやスカルドゥなど、パキスタン側カシミールに居住するイスラムの間にも、カシミールへの関心は皆無である。最近な話になるが、2012年6月にカシミール大学(スリナガル)のキャンパスで学生たちと現代カシミールについて議論をした際に、学生たちはパキスタン側のカシミール人たちも、当然自分たちと同じようにカシミールへの関心に基づくサブ・ナショナリズムを抱いているものと考えていた。筆者がパキスタン側カシミールの人々にそのような関心が殆どないことを告げると、彼らは驚きを隠せずにいた。

Muhibb al-Hasan, *Kashmīr salāṭīn ke 'ahd meṅ*, 'Alī Ḥammād 'Abbāsī (tr.), A'zamgarh, Dār al-Muṣannifīn, 1967. (AQEEL||A||309||12)

Mohibbul Hasan, *Kashmir Under the Sultans* のウルドゥー語訳。本書の著者ムヒッブル＝ハサン (1908–1991) は、オックスフォード大学で学位を取ったのち、アリーガル・ムスリム大学、ジャーミア・ミッリーヤ・イスラミーヤ (デリー)、カシミール大学などで教鞭を執った人物である。専門はペルシア語史料を主に利用した南アジア中世史・近世史で、*History of Tipu Sultan* や *Babur: founder of the Mughal Empire in India* などの著作のほか、フランスにおけるトルコ学の碩学である Jean Louis Bacqué-Grammont との共著、*Le livre des Babur = Bābur nāmah: mémoires du premier Grand Mongol des Indes, 1494–1529* といった業績を残している。英語で書かれた原著は、1952年にムヒッブル＝ハサンがカシミールを訪れた折に、当時のチーフ・セクレタリーがシャーミール朝時代のカシミールに関するモノグラフの執筆を依頼し、その成果として Iran Society から1959年に出版されたものである。執筆にあたって著者は当時としては出来る限りの一次史料にあたっている。また史料の情報に基づいた考察は実証的かつ冷静なものであり、流石に今日では修正されるべき見解が少なからずあるとは言え、同書はカシミール・ムスリム王朝史研究において必ず参照されるべき文献となっている。

Muḥammad A'zam Dīdahmarī, *Wāqī 'āt-i Kashmīr*, Khwāja Ḥamīd Yazdānī (tr.), Lahore, Iqbal Academy, 1995. (AQEEL||A||309||14)

AH1160/1747CE に完成した、ペルシア語のカシミール地方史のウルドゥー語訳である。原典の著者ムハンマド・アアザム (1101–02/1689–91AH–1185/1771–2CE) はカシミールのショール職人の家に生まれ、Muḥammad Murād Naqshbandī に教導を受けた人物で、本書の他に *Fayḍ al-Murād* という師の伝記・言行録や、*Fawā'id al-Mashā'ikh*, *Risāla-yi Ithbāt al-Jabr* といった作品を著している。本書はカシミールの太初から1747年に至る歴史をまとめたものだが、先行するペルシア語カシミール地方史とはいささか叙述の分量が異なっており、シャーミール朝成立以前のヒンドゥー王朝時代の叙述を簡潔にする一方で、ムスリムのスーフィー、詩人、学者などの伝記集に多くの分量を割いている。これはムハンマド・アアザムが異教徒に対して批判的な見解を持っており、『ラージャタランギー』に由来する歴史情報をそのまま記録することをあまり快く思っていなかったためである。ムガル朝併合以前のカシミール史の史料が、異教徒であるバラモンたちの手によって編纂された『ラージャタランギー』であることは、17世紀以降の同地のムスリム史家たちの間でよく知られていた。ハイダル・マリクの『カシミール史』(1620–21完成)など、『ラージャタランギー』由来の情報を信頼できるものとして採用する作品と比べると、本書の叙述方針は対照をなしている。異教徒の手による文献の多様な受容のあり方を見る上で興味深い。写本の残存状況に鑑みて、本書はペルシア語カシミール地方史の中でも比較的よく読まれた作品だったようである。1886年にラホールで校訂本が出版されたが、これは世界でも所蔵している図書館が稀な稀版本である。現在ではこのウルドゥー語訳が広く流通している。

Sayyid Maḥmūd Āzād, *Tārīkh-i Pūnch*, Pūnch (Āzād Kashmīr), Idāra-yi Ma'ārif-i Kashmīr, 1975. (AQEEL||A||309||28)

プーンチとは管理ラインによって分断された、インド・パキスタン両国にまたがるジェーラム川

流域の地域である。歴史上地域の主邑であった同名のプーンチは、現在インド側の管理ラインから東に約 4km の場所にあり、パキスタン側の中心都市はラーワラーコートになっている。この地域は古くからインダス川流域の平野部とカシミール盆地を結ぶ交易路の中継地点として栄えており、玄奘が『大唐西域記』の中で言及しているほか、ムガル朝時代にはラホールとスリナガルを結ぶ街道の経由地になっていた。本書はパキスタン側で出版されたプーンチの歴史を扱った文献であるが、まずもってパキスタン側のプーンチに郷土史家がおおり、学術書を出版する環境があることを確認できる点で重要である。本書の叙述を見ると、まず古代史の短い記述から始まり、ガズナ朝 3 代君主マフムードのインド遠征、そしてシャームール朝を始めとするムスリム王朝の記述と続いている。インド側で出版されたプーンチの歴史を扱った文献 (K. D. Maini, *Poonch: The Battlefield of Kashmir*, Srinagar, Gulshan Books, 2012) と比べてみると、こちらは在地の地方領主の統治にも紙数を割いており、インド側とパキスタン側、双方で出版された文献の中で叙述の重点の違いが見られて興味深い。

参考文献

- 拓徹 2010 「草創期の用語「カシミールヤット」について」『現代インド研究』1, pp. 159–176.
- Ahmad Hasan. 2001. *History of Northern Areas of Pakistan (Up to 2000 AD)*. Lahore, Sang-e-Meel Publications.
- Elias, Jamal. 2000. “A Second ‘Alī: The Making of Sayyid ‘Alī Hamadānī in Popular Imagination,” *Muslim World* 90, pp. 395–420.
- Maini, K. D. 2012. *Poonch: The Battlefield of Kashmir*. Srinagar, Gulshan Books.
- Zia ul-Haq, Muhammad. 1988. “Inaugural Address: Presidential Address by General Zia ul-Haq, President of Pakistan in inaugural session of Shah-e-Hamadan International Conference held at Muzaffarabad Azad Kashmir on October 2, 1987,” in Agha Hussain Hamadani and Muhammad Rias (eds.), *Shah-e-Hamadan Commemorative Volume*. Muzaffarabad, pp. 19–22.
- Zutshi, Chitralekha. 2004. *Language of Belonging: Islam, Regional Identity and the making of Kashmir*. New York.